

## 新学会に期待すること

渡辺 敦史<sup>\*1</sup>

森林遺伝育種学会設立、心よりお祝い申し上げます。林木育種分野における輝かしい業績を国内の研究者に広める役割を長年果たしてきた林木育種協会の取り組みが「林木育種」から「森林遺伝育種」へと枠組みを広げる形になったこと、また、学会へと発展する形になったことは、これまで牽引して下さった林木育種協会の皆様や諸先生方のご尽力があって初めて成し遂げられたことと存じます。まずは、学会設立の関係者の皆様に敬意と感謝を申し上げたいと思います。

第1回森林遺伝育種学会シンポジウムが2012年3月に、第1回森林遺伝育種学会が同年11月に開催され、共に参加する機会を得ることが出来ました。育種分野は遺伝学を基礎としつつも、多岐にわたる分野と融合し、連携する必要性のある、まさに学際領域分野であると考えています。実際、前述の2つの会合では、実に様々な分野の研究発表が繰り広げられており、その学問分野の幅の広さには長年、育種分野に携わってきた1人としても目を見張るものがありました。林木育種分野は、森林学会でも発表する機会があるとは言え、全国レベルでの取り組みを一堂に目にする機会はどちらかと言えば少なく感じていたことから考えれば、単純にその機会が増えたことは素直に喜ばしいことですし、森林学会は、専門分野単独でセッションが成立するため、学際領域にも関わらず、関連研究が様々なセッションに散在することから、中々すべてに触れることが出来なかったことを考えれば、森林遺伝育種学会という様々な分野が一堂に会する場が与えられたことは多くの研究者にとって非常に有益であると思います。微力ではありますが、今後とも本学会の発展に寄与できるよう努力する所存です。

私事ではありますが、2012年8月に長年勤めてきた森林総合研究所林木育種センターを退職し、九州大学に転出いたしました。林木育種センター在籍時には、研究だけではなく、多くの事業や現場作業にも携わってきました。その中で得たものは、基礎研究を積み重ねることで生命現象の本質的理解に向けた取り組みを行うことの重要性和研究成果を現場に活かすためには現場の実態を深

く理解するのと同時に、基礎研究から得られた成果に基づいて現場に役立つ技術を作り上げることの重要性です。私は現場に役立つ技術開発を基礎研究と対比させ、「応用研究」と呼んでいます。最近、マツノザイセンチュウ抵抗性に関する遺伝子関連の研究成果を公表しましたが、この成果を直接、抵抗性育種に繋げることは現段階では困難です。しかし、この成果があってこそ、交配計画の妥当性や人工接種検定の諸問題を再考する機会を得ることが出来たと考えています。事業に直結できる「応用研究」の成果が得られるのはまだまだこれからではありませんが、マツノザイセンチュウ抵抗性育種事業に直接関与し、また関連する基礎研究に携わってきたからこそ、「応用研究」の必要性を痛感できるのではないかと自負しております。林木育種センター在籍時には、多くの試験地の成長量調査や苗畑作業にも従事し、育種現場の中で検討すべき事例に数多く直面しました。これらの経験が得られたことを誇りに思い、今後の研究生活に活かしていきたいと考えております。

残念ながら大学では事業を経験する機会はほとんどなく、現場を知ることは困難ですが、森林遺伝育種学会に参集される方の多くは現場でまさに汗を流している研究者の皆様だと思います。現場を知る機会が少ない次代を担う研究者や学生でも、本学会に参加すれば、多岐にわたる分野の、多岐にわたる研究成果から、その一端に触れることが可能です。森林関連の研究は、長年月の取り組みで初めて成果として得られる事例が少なくありません。多くの先達が培い、まさに今最前線の研究者によって、諸問題の解決を図るための研究成果を本学会で目にするのが可能であると思います。森林遺伝育種分野の益々の発展を願うと共に、本学会を通じて次代を担う全ての若手研究者や学生へ皆様の経験が伝わることを期待しております。

<sup>\*</sup>E-mail: nabeatsu@agr.kyushu-u.ac.jp

<sup>1</sup>わたなべ あつし 九州大学大学院農学研究院